



授業や学校行事など、 教育活動のねらいを「見える化」し、 身につけさせたい資質・能力を明確化

東京都立淵江高校ふちえ

アクティブ・ラーニング導入 を機に教育活動全体を見直す

東京都立淵江高校では、生徒が主体的に学ぶ授業を目指し、2015年度から、各教科でアクティブ・ラーニング（以下、AL）の視点を取り入れた授業改善を進めてきた。16年度には、東京都教育委員会「アクティブ・ラーニング推進校」の指定を受け、取り組みを深める中で、カリキュラム・マネジメントの重要性に気づいたという。降幡高志副校長は次のように話す。

「授業改善を進める中で、ALで大切なのは、生徒の実態に応じて授業や単元の目標を適切に設定し、それを生徒に示して、見通しを持って学ばせたり、振り返らせたりすることだと見えてきました。目標設定を追究していくと、まず、教育活動全体を通して、生徒に身につけさせたい資質・能力を明らかにし、学校のグランドデザインを明確にすることが不可欠だと分かりました」

17年度からは、東京都教育委員会「カリキュラム・マネジメント推進校」の指定も受け、その研究を進めてきた。



写真 生徒に身につけさせたい資質・能力を付せん紙に書き出し、KJ法で整理。グループごとに3～4つに分類して模造紙に概念図を作成し、それを発表し合って共有した。

育成を目指す資質・能力を カリキュラム・マップに示す

まず、生徒に身につけさせたい資質・能力を設定するため、全教員でワークショップを行った（写真）。生徒の実態と課題を確認し合った後、グループに分かれて生徒に身につけさせたい資質・能力を出し合い、全体で共有。その後、降幡副校長や主幹教諭が検討し、4つの枠組みと14の資質・能力に整理した（図）。そして、各資質・能力のルーブリックも作成し、どう育成を図ればよいのかを具体的にイメージできるようにした。

「以前から、教員間で共通認識を図りながら生徒指導を行い、さらに、全校でALを進めてきたため、身につけさせたい資質・能力についても

大きな認識のずれはなく、スムーズに共有できました」（降幡副校長）

18年度は、次のステップとして、各資質・能力をどの教科・科目や教科外活動で重点的に育成するのか、各教科会や分掌で検討した。

「当初、担当教科・科目でどの資質・能力の育成に重点を置けばいいのか、多くの教員が判断が難しいと感じていました。そこで、従来の指導で大切にしてきた思いを整理し、見える化するようになりました。そうした作業を進めるうちに、さらに力を入れるべき指導も見えてきました」（降幡副校長）

そうして、各教育活動において育成を目指す資質・能力を明確化した「教科用」と「教科外活動用」のカリキュラム・マップの概念図を完成させた。進路指導部主任の片桐慶久かたぎりよしひさ先生は作成の意図をこう説明する。

「教員はつい自分の担当教科・科目に注目しがちですが、カリキュラム・マップの作成によって教育活動全体を通して資質・能力を育成する意識が高まりました。本校が力を注ぐ学校行事や国際交流、ボランティア活動などの教科外活動の教育的な意義も確認できました」

*「学校教育デザイン」とは、本誌が2017年度6～12月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。



東京都立淵江高校校長
杉淵明子 すぎふちあきこ
 教職歴36年。同校に赴任して1年目。



東京都立淵江高校副校長
降幡高志 ふりはた たかし
 教職歴37年。同校に赴任して4年目。



東京都立淵江高校
片桐慶久 かたぎり よしひさ
 教職歴31年。同校に赴任して3年目。主幹教諭。進路指導部主任。



東京都立淵江高校
小澤憲司 おさわ けんじ
 教職歴14年。同校に赴任して4年目。主幹教諭。教務・総務部主任。

東京都立淵江高校

◎教育重点目標は、「学力の向上」「規範意識の涵養」「穏やかな心身の育成」。2018年度、東京都教育委員会「アクティブ・ラーニング推進校」「ボランティア活動推進校」「カリキュラム・マネジメント推進校」等の指定を受けている。国際交流活動を始めとした国際理解教育にも力を入れている。

◎設立 1971（昭和46）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約230人

◎2018年度進路実績（現役のみ）私立大は、流通経済大、明海大、国士舘大、拓殖大、帝京大、東京工科大、東京電機大、武蔵野大、目白大、立正大などに延べ62人が合格。短大、専門学校進学73人。就職62人。

◎URL <http://www.fuchie-h.metro.tokyo.jp/site/zen/>

全員で考えた目指す指導を实践、 振り返るPDCAサイクルを確立

現在は、カリキュラム・マップ（図）を基に、各教科・科目や教科外活動の指導改善を進めている。18年10月に実施された化学の公開授業では、資質・能力の育成に焦点をあてた授業のあり方を共有した。

「指導案の作成では、『この資質・能力をつけるためにどのような学びを展開すればよいか』『これまでの指導はこの資質・能力の育成につながっていたのか』など、試行錯誤を重ねました。その過程で、授業者は、授業の目的、すなわち育成を目指す資質・能力を明確にすると指導がしやすく、生徒の学びも深まると感じていました」（降幡副校長）

各教科・科目のルーブリックの作成も進めており、今後は教科外活動のルーブリックも作成予定だ。教務・総務部主任の小澤憲司先生は、次のように語る。

「全員で考えた目指す指導を实践に移し、振り返りを通じて効果を検証し、さらに概念を修正するサイクルが確立されつつあります。カリキュラム・マネジメントに基づく教

育活動の最初の一步がようやく踏み出せたと感じています」

18年度中にはグランドデザインも練り上げ、教員と生徒だけでなく、家庭や地域とも共有し、教育活動のさらなる充実につなげたいと考えている。杉淵明子校長は、今後の展望を次のように述べる。

「A.Lの実践を通して、生徒の主体性やコミュニケーション能力が着実に育っていると実感しています。その延長としてカリキュラム・マネジメントの取り組みがあり、一人ひとりの生徒の資質・能力をいかに高めるかを考えることに大きなやりがいを感じています。社会は変化していますし、生徒は一人ひとり異なります。教育活動に完成はありません。今後も、常に走りながら改善を重ねる姿勢で取り組んでいきます」

4つの枠組みと14の資質・能力を図示した「教科用」のカリキュラム・マップ



上図とは別に、「教科外活動用」のカリキュラム・マップも作成した。＊学校資料をそのまま掲載

導かれた道標

これまでの実践を振り返り、整理することで
 今後の学校の姿・指導のあり方が見えてくる

